

国

語

(
解答
番号
)

1

5

37

(

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に [1] ～ [8] の番号を付してある。

(配点 50)

[1] 椅子の「座」と「背」について生理学的にはふたつの問題があった。西欧での椅子の座法は、尻、腿、背をじかに椅子の面に接触させる。そこに自らの体重によって圧迫が生じる。接触とはほんらい相互的であるから、一方が硬ければ軟らかい方が圧迫される。板にじかに座ることを考えればよい。ひどい場合には、血行を阻害する。たぶん椅子の硬さは、人びとに「血の流れる袋」のような身体のイメージを喚起していたにちがいない。もうひとつは椅子に座ることで人間は両足で立つことから解放されるとはいえ、上体を支えるには、それなりに筋肉を不断に働かせている。この筋肉の緊張が苦痛をもたらすことは、私たちが椅子の上で決して長時間、一定の姿勢をとりつづけられず、たえず動いている方がずっと楽だという経験的事実からも明らかである。椅子は休息のための道具とはいえ、身体に生理的苦痛をひきおこすものでもある。

[2] 一七世紀の椅子の背が後ろに傾きはじめてしたのは、上体を支える筋肉の緊張をいくらかでも緩和するためであった。そのためには身体を垂直の姿勢から次第に横臥おうがの状態に近づけていけばよい。イノケンティウス一〇世の肖像でみたように、公的な場(注1)で使われる椅子では決して威厳を失うほど後ろに靠もたれた姿勢がとられなかったが、「背」の後傾が純粹に生理的な身体への配慮から追求される場合もあった。その結果が、私たちがもつと後の時代の発明ではないかと想像しがちなクライニング・チェアの発明になった。これにキャスターをとりつけた車椅子も同時にうまれていた。このふたつとも、もちろん、一七世紀にあつては高位の身障者、病人のために発明されたのである。リクライニング・チェアは、骨とそれをつつむ筋肉からなる一種のバロック的な「身体機械」のイメージを(注2)イダかせたにちがいない。次の世紀には『人間機械論』があらわれて、「人間はゼンマイの集合にすぎない」というようになる時代である。

[3] 一七世紀半ばにスペインの王フェリペ二世のために考案された椅子のスケッチが残っている。普通の状態ではすでにあげた一七世紀の椅子のかたちと同じだが、後ろに重心がかかるから、倒れないために後脚を少し斜め後ろに張り出している。馬

の毛を填めたキルティングで蔽った背は両側の大きな留め金具で適度な傾きに調整でき、足台も同様の留め金具でそれにあわせて動かせるので、背を倒し足台を上げると、身体に横臥に近い姿勢をとらせることができる。こうして背を立てていると王者らしい威厳も保てる車椅子が考えられていた。実際にフェリーペ二世のためにつくられた車椅子はこのスケッチとは若干ことなり、天幕を張っていたようであり、足台はなかった。このような仕掛けはいろいろ工夫される。たとえばスウェーデンのチャールス一〇世の身障者椅子では、背と足台を腕木にあげた穴を通した紐で連動させていた。病人用の椅子から、背の両側を目隠し用の袖を立てた仮眠のためのスリーピング・チェアが生まれ、それは上流社会で静かに流行した。

- 4 A もうひとつの生理的配慮も、背の後傾とどちらが早いともいえない時期に生じている。どちらも身体への配慮にもとづくから不思議ではない。椅子からうける圧迫をやわらげる努力は古くから行われてきた。エジプト人は座に曲面をあてた椅子をつくっていたし、植物センイや革紐で網をあん座の枠に張つてもいた。ギリシャのクリスモスの座も編んだしなやかなものであった。しかし、それでも充分とはいえなかったため、古代からクッションが使われてきた。エジプトでもアッシリアでも玉座には美しいクッションが使われているし、ギリシャのクリスモスの上にもクッションを置いて使うのが常であった。中世では四角い膨らんだクッションがそれ自体可動の家具のようにさえなっていた。長持ちはその上にクッションを置けば腰掛けにもなった。窓ぎわの石の腰掛けもクッションを置きさえすれば快適だった。クッションは石や木の硬さをやわらげ、身体は軟らかい触覚で座ることができた。しかし、いまから考えれば驚くことだが、クッションはその美しい色彩とともに、それだけでステータスを表示する室内装飾のひとつの要素だったのである。クッションを使うこと、つまり身体に快適さを与えること自体が政治的特権であった。オランダ語で「クッションに座る」といえば、高い官職を保持することを意味したといわれるが、この換喩法が成立すること自体、いかにクッションの使用が階層性と結びついていたかを物語っている。たしかに王や女王、貴族たちを描いた絵画や版画を調べていくと、さまざまな意匠のクッションがその豊富なヴォリュームと色彩をコジするように使われているのである。

5 こうして別々に作られ、使うときに一緒にされていた椅子とクッションが一六世紀から一七世紀にかけてひとつになりはじめた。この結びつけの技術は一七世紀のあいだに著しく発達する。最初は木の座や背の上に詰め物を素材にとりつけることから始まったが、椅子張り職人(ア)アプホルストラー——(注9)実際にはテキスタイル全般をあつかった職人(エ)の技術の向上とともに、布や革で蔽われた座や背はほとんど今日のものにミ(エ)オトリしないほどに進んだ。こうした詰め物は、たんにクッションを椅子に合体させただけではなかった。それまで硬かった椅子そのもののイメージを軟らかくしてしまったことが、椅子についての概念を決定的に変え、近代の方向に椅子を押しやるきっかけになったのである。(注10)エリック・マーサーも指摘するように椅子の近代化は形態からではなく、装飾の消去からでもなく、身体への配慮、あらたに見出された快樂を志向する身体による椅子の再構成からはじまったのであった。

6 だが、近代人ならばすぐに機能化と呼んでしまいそうな椅子を成立させた思考も技術も、一七世紀にあつては限られた身分の人間なればこそ生じた身体への配慮のなかに形成されたのである。つまり傾いた背をもつ椅子も、詰め物で軟らかくなった椅子も、それ自体をいま見る限りでは「身体」との関係で説明し切れるように思えるが、さらに視野をひろげて階層社会をみれば、「もの」はほんらい社会的な関係——ここでは宮廷社会——にとりまかれ、身分に結びつく政治学をひそかにもっていたのである。むしろ「もの」を機能的にだけ理解することはすでに一種の抽象である。私たちが普通、この時代の家具とみなしているものは、実は支配階級の使用するものであり、一六世紀頃からは版画による意匠集の出版、「人形の家」という玩具でもあれば一種の商品見本でもあるものによって、新しい意匠の伝播が生じるが、それは国境を越えて他の国の宮廷、小宮廷貴族、大ブルジョワジーには伝わっても、同じ国の下層へひろまることはなかった。私たちはあらためて「身体」という概念が、自然の肉体ではなく、普遍的な哲学の概念でもなく、文化の産物であり、ここまで「生理的配慮」とよんできたものも、宮廷社会のなかで生じた新しい感情やそれに伴う新しい振舞方と切り離せない文化的価値だったことに気がつくのである。その時代に哲学ではスピノザをのぞけば「身体」の不思議さに謎を感じているものはなかったのである。(注12)

7 生理的快適さに触れたとき、椅子に影響する身体を「血の流れる袋」とか「筋肉と骨からなる身体機械」とか、解剖学的肉体に

もとづくイメージであるかのように語ったが、**B** 実際には椅子に掛けるのは「裸の身体」ではなく「着物をまとった身体」なのである。衣装は一面では仮面と同じく社会的な記号としてパフォーマンズの一部である。同時に、実際にかさのある身体として椅子の形態に直接の影響をあたえていた。一六世紀には婦人たちは鯨骨を用いてひろがったスカート(ファージンゲール)で座るために、「背」はあるが腕木はないバック・ストूलや、ズガベルロ(イタリアの椅子のタイプ)がうまれたし、一八世紀のフォートウイユ(安楽椅子)の腕木がずっと後方にさげられるのも、やはり婦人たちの膨らんだスカートのためであった。このように文化としての「身体」は、さまざまの意味において単純な自然的肉体ではないのである。もちろんこの衣装も本質的には宮廷社会という構図のなかに形成されるし、宮廷社会への帰属という、政治的な記号なのである。

8 やがてブルジョワジーが上昇し、支配の座につくとき、かれらはかつての支配階級、宮廷社会がうみだし、使用していた「もの」の文化を吸収するのである。^(注13)ベンヤミンが「ルイ・フィリップあるいは室内」で幻影として批評したブルジョワジーの家具、調度類は、この宮廷社会の「もの」の文化のケイ^(注14)フに属していた。いいかえるならそっくりそのままではないが、ブルジョワジーは支配階級の所作のうちに形成された「身体」をひきついで、働く「身体」に結びつけ、十分に貴族的な色彩をもつブルジョワジー固有の「身体技法」^(注14)をうみだしたのである。**C**「身体」の仕組みはそれ自体、すでにひとつの、しかし複雑な政治過程を含んでいるのである。

(多木浩二「もの」の詩学」による)

- (注)
- 1 イノケンティウス一〇世の肖像——スペインの画家ベラスケスが描いた肖像画。わずかに後傾した椅子にモデルが座っている。
 - 2 バロック——芸術様式の一つ。技巧や有機的な装飾を重視し、動的で迫力ある特色を示す。
 - 3 『人間機械論』——フランスの哲学者ラ・メトリの著書。
 - 4 キルティング——刺繍の一種。二枚の布のあいだに綿や毛糸などを入れ、模様などを刺し縫いする。
 - 5 クリスモス——古代ギリシャからローマ時代にかけて使われた椅子の一種。

- 6 長持ち——衣類や調度などを収納する、蓋付きの大きな箱。
- 7 ステータス——社会的地位。
- 8 換喩法^{メトニミー}——あるものを表す際に、関係の深い別のもので置き換える表現技法。
- 9 テキスタイル——織物。布。
- 10 エリック・マースー——イギリスの建築史家（一九一八—二〇〇一）。
- 11 ブルジョワジー——裕福な市民層。ブルジョアジー。
- 12 スピノザ——オランダの哲学者（一六三二—一六七七）。
- 13 ベンヤミン——ドイツの批評家（一八九二—一九四〇）。
- 14 「身体技法」——フランスの民族学者モースによる概念。人間は社会の中で身体の扱い方を習得することで、特定の文化に組み入れられるという考え方。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

- イダ|かせ
① 複数の意味をホウ|ガンする
② 卒業後のホウ|フ
③ 港にホウ|ダイを築く
④ 交通量がホウ|ワ状態になる

(イ)

- セン|イ
① 現状をイ|ジする
② アン|イな道を選ぶ
③ キョウ|イ的な回復力
④ 条約にイ|キヨする

(ウ)

- コ|ジ
① 偉人のカイ|コ録
② 液体のギョウ|コ
③ コ|チヨウした表現
④ コ|コウの詩人

(エ)

- ミ|オトリ
① 商品を棚にチン|レツする
② モウ|レツに勉強する
③ 風船がハ|レツする
④ ヒ|レツな策を用いる

(オ)

- ケイ|フ
① フ|ゴウしない証言
② フ|メン通りの演奏
③ フリ|ヨの事故
④ 家族をフ|ヨウする

問2 傍線部A「もうひとつの生理的配慮も、背の後傾とどちらが早いともいえない時期に生じている。」とあるが、それはどう

いうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 身体を横臥の状態に近づけて上体の筋肉を不断の緊張から解放する配慮が現れたのとほとんど同じ時期に、椅子にキャスターを付けて可動式とし、身体障害者や病人の移動を容易にするための配慮も現れたということ。
- ② 椅子の背を後傾させて上半身を支える筋肉の緊張をやわらげる配慮が現れたのとほとんど同じ時期に、椅子と一体化したクッションを用いて背や座面から受ける圧迫をやわらげる配慮も現れたということ。
- ③ 椅子の背を調整して一定の姿勢で座り続ける苦痛をやわらげる配慮が現れたのとほとんど同じ時期に、後傾した椅子の背にクッションを取り付けることによって体重による圧迫を軽減する配慮も現れたということ。
- ④ 椅子の背を後ろに傾けて上体の筋肉の緊張を低減しようという配慮が現れたのとほとんど同じ時期に、エジプトやギリシャにおいてクッションを用いることで椅子の硬さを低減させる配慮も現れたということ。
- ⑤ 後傾させた椅子の背によって上半身の筋肉を緊張から解放する配慮が現れたのとほとんど同じ時期に、それ自体が可動式の家具のようにさえなつたクッションを用いて椅子の硬さを緩和する配慮も現れたということ。

問3

傍線部B「実際に椅子に掛けるのは『裸の身体』ではなく『着物をまとった身体』なのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 宮廷社会の家具の意匠が国境と身分を越えて行き渡ったということは、身体に配慮する政治学の普遍性を示すものであり、人々が椅子に座るときの服装やふるまいといった社会的な記号の由来もここから説明できるといふこと。
- ② 貴婦人の椅子が彼女たちの衣装やふるまいに合わせてデザインされていたように、椅子の用い方には生理的な快適さの追求という説明だけでは理解できない文化的な記号としての側面もあったといふこと。
- ③ 座るのは自然的肉体であっても、服装のヴォリュームも考慮に入れた機能的な椅子が求められており、宮廷社会では貴族の服飾文化に合わせた形態の椅子がこれまでとは異なる解剖学的な記号として登場したといふこと。
- ④ 宮廷社会の椅子には、貴族たちが自分の身体に向けていた生理的な快適さへの関心を、機能性には直結しない服飾文化に振り向けることで仮面のように覆い隠そうとする政治的な記号としての役割があったといふこと。
- ⑤ 椅子と実際に接触するのは生身の身体よりも衣服であるから、貴婦人の衣装やパフォーマンスを引き立たせるために、生理的な快適さを手放してでも、社会的な記号としての華美な椅子が重視されたといふこと。

問 4

傍線部C「身体」の仕組みはそれ自体、すでにひとつの、しかし複雑な政治過程を含んでいるのである。」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8

① ブルジョワジーはかつて労働者向けの簡素な「もの」を用いていたが、支配階級に取って代わったとき、彼らの「身体」は「もの」に実用的な機能ではなく、貴族的な装飾や快楽を求めるようになった。このように、本質的には人間の「身体」は、新しい「もの」の獲得によって新たな感覚や好みを備えて次々と変容していくものだということ。

② ブルジョワジーは働く「身体」という固有の特徴を受け皿にして、かつての支配階級が所有していた家具や調度類といった「もの」を受け継ぎ、それを宮廷社会への帰属の印として掲げていった。このように、「身体」と「もの」の文化は部分的に支配階級の権威の影響を受けており、相互に影響し合って単純に固有性が見いだせるものではないということ。

③ ブルジョワジーがかつての支配階級に取って代わったという変革は単なる権力の奪取ではなく、貴族に固有の「もの」や「身体」で構成された宮廷文化を解消していくという側面も持っていた。このように、「身体」にかかわる文化は永続的なものではなく、新しい支配階級に合った形がそのつど生じるので予見できないということ。

④ ブルジョワジーがかつての支配階級の所作を受け継いだやり方はそのままではなく、貴族の社会における「もの」の用い方を、労働者の「身体」に適応させるような変化をともなっていた。このように、働く「身体」には「もの」の機能を追求し、それに応じて「もの」の形態を多様化させる潜在的な力があるということ。

⑤ ブルジョワジーは新しい支配階級となるにあたって貴族社会のすべてを拒否したわけではなく、彼らの働く「身体」に応じて、宮廷社会の「もの」に付随する所作や感覚を受け継いで再構成した。このように、人間の「身体」には、権力構造の変遷にともなうさまざまな社会的要素がからみ合い、新旧の文化が積み重なっているということ。

問5 この文章の構成と内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

① 段落では、本文での議論が最終的に生理学的問題として解決できるという見通しを示し、2～5段落では、

支配階級の椅子を詳しく描写しながら1段落で触れた問題を解決するための過去の取り組みを説明している。

② 5段落は、椅子の座や背を軟らかくする技術が椅子についての概念を決定的に変えてしまったことを述べており、

6段落以降でもこの変化が社会にもたらした意義についての議論を継続している。

③ 6段落と7段落では、生理学的な問題への配慮という角度から論じていたそれまでの議論を踏まえて、さらに

「もの」の社会的あるいは政治的な記号という側面に目を向ける必要性を説いている。

④ 8段落は、新たな支配階級がかつての支配階級の「もの」の文化を吸収し、固有の「身体技法」を生み出したことを述

べ、5段落までの「もの」の議論と6段落からの「身体」の議論の接続を行っている。

問6 次に示すのは、この文章を読んだ後に、教師の指示を受けて六人の生徒が意見を発表している場面である。本文の趣旨に

合致しないものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

10

11

教師——この文章では「もの」と「身体」との社会的関係について論じていましたね。本文で述べられていたことを、皆さんの知っている具体的な例にあてはめて考えてみましょう。

① 生徒A——快適さを求めて改良されてきた様々な家具が紹介されていましたが、家に関しても寒い地域では断熱性が高められる一方で、暑い地域では風通しが良いように作られています。私たちの「身体」がそれぞれの環境に適応して心地よく暮らしていくための工夫がいろいろ試みられ、近代的な家屋という「もの」の文化を生み出しています。

② 生徒B——身につける「もの」に複数の側面があるということは、スポーツで用いるユニホームについても言えると思います。競技の特性や選手の「身体」に合わせた機能性を重視し、そろいのデザインによって所属チームを明らかにすることはもちろんですが、同じ「もの」をファンが着て一体感を生み出す記号としての役割も大きいはずです。

③ 生徒C——「身体」という概念は文化の産物だと述べられています。私たちが箸を使うときのことを思い出しました。二本の棒という「もの」を用いて食事をするわけですが、単に料理を口に運べばよいのではなく、その扱い方には様々な「身体」的決まり事がある。それは文化によって規定されているのだと思います。

④ 生徒D——「身体」がまとう衣装は社会的な記号であるということでしたが、明治時代の鹿鳴館ろくめいかんでは当時の上流階級が華やかな洋装で交流していたそうです。その姿は単なる服装という「もの」の変化にとどまらず、西洋の貴族やブルジョワジーの「身体」にまつわる文化的な価値を日本が取り入れようとしたことを示しているのではないのでしょうか。

⑤ 生徒E——支配階級の交代にともなって「身体」のありようが変容するとありましたが、現代ではスマートフォンが登場によって、娯楽だけでなく勉強の仕方も大きく変わってきています。このような新しい「もの」がそれを用いる世代の感覚やふるまいを変え、さらには社会の仕組みも刷新していくことになるのではないのでしょうか。

⑥ 生徒F——椅子や衣装にともなう所作のもつ意味に関連して、私たちが身につける「もの」の中でも、帽子には日射しを避けるという機能とは別の「身体」のふるまいにかかわる記号としての側面もあるのではないのでしょうか。「脱帽」という行為は相手への敬意を表しますし、帽子を脱いだ方がふさわしい場もあると思います。

第2問

次の文章は、津村記久子「サキの忘れ物」(二〇一七年発表の一節である。十八歳の千春は高校を中退し、病院に併設されている喫茶店で、店長の谷中さんとアルバイトの先輩の菊田さんと働いている。ある日、常連客の「女の人」が喫茶店に文庫本を忘れる。その本は、「サキ」という名前の外国人男性作家が書いた短編集だった。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1、6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

本を店に忘れた女の方は、いつもと同じように夜の八時にやってきた。女の方は、席に着くなり申し訳なさそうに、私昨日忘れ物をしていったかもしれないんですけど調べてもらえますか？ 文庫本なんですけど、と千春に言った。千春は、ありましたよ、とうなずいてすぐに忘れ物の棚に取りに行き、女の方に本を渡した。女の方は、よかった、電車に忘れてたら買い直そうと思ってたんだけど、とうれしそうに笑って本を受け取った。

5 「ここに忘れてよかったです。電車だと手続きが面倒だし、たぶん戻ってこないから」
「どうなんですか」

ここに忘れてよかった、というのはなんだかへんな表現だと千春は思う。でも、女の方がとても喜んでる様子なのはよかった。た。

10 「サキ」はおもしろいですか？ (注1) どんな話を書いているかわからない顔の男の方ですね。私は別れた彼氏と付き合ってた頃、この人と結婚して娘ができたならサキっていう名前にしようと思っていました。

千春は、頭の中でそう言いながら、女の方のオーダーを取った。珍しいことだった。千春が誰かに何かを話しかけたいと思うことは、何を話しかけたいか、ちゃんと頭の中に文言が出てくるということ。

女の方は、チーズケーキとブレンドコーヒーを注文した。チーズケーキは、昨日帰り際に谷中さんが仕込んでいたもので、たぶん最後のいきれだったはずだ。

15 あなたは運がいいですよ。

千春はそう思いながら、もちろんそれも口にはしなかった。

手順通りコーヒを淹^いれて、チーズケーキを冷蔵庫から出して、昨日店に本を忘れた女の人の席へと持って行く。谷中さんは厨房^{ちゅうぼう}で、昨日と同じように明日のチーズケーキの仕込みをしていた。午前^(注2)に千春がビルマのことについてたずねたことは、完全に忘れていたようだった。

20 ソーサーに乗せたコーヒークップと、チーズケーキのお皿をテーブルの上に置くと、女の人は、いい匂い、と言った。初めてのことだった。もしかしたら今日、忘れ物に関して注文以外の会話をしたからかもしれないし、この店に来るまでに何か良いことがあったのかもしれない、と千春は思った。

「お客さんは運がいいですよ。ケーキ、最後の一個だったんで」

25 そう話しながら、緊張で全身に血が巡るような感覚を千春は覚えた。今年の五月から半年ぐらいここで働いているけど、お客さんに話しかけるのは初めてだった。

「どうなんですか、それはよかったです」

女の人は、千春を見上げてかすかに笑った。千春はその表情をもう少しだけ続けさせたい、と思つて、本をこの店に忘れてよかったですね、と女の人が言っていたことをそのまま言った。女の人はうなずいた。

「友達のお見舞いに来てるんですけど、眠ってる時間が長くて、本がないと間が持たないんですよ」

30 あと、ここから家までも一時間ぐらいあるし、と女の人は付け加えた。遠くから来ているのだな、と千春は思った。いくつか情報を与えられて、フロアには他のお客さんもいなかったし、もう少し話を続けてみよう、と千春は決めた。

「遠くからお越しなんですね」

「携帯を見ていてもいいんですけど、電車で見ると頭が痛くなるんですよ。ほんともう年だから」

35 おいくつなんですか？ と言いかけて、千春はやめる。女の人に年を訊^きくのは失礼にあたるかもしれないということぐらいは、千春も知っている。

「私は電車に乗らなくなってだいぶ経つから、そういう感じは忘れまし」
「それは幸せですわねえ」

女の人にそう言われると、千春は自分が少しびびりするのを感じた。他の人に「幸せ」なんて言われたのは、生まれて初めてのような気がしたのだ。小さい頃にはあったかもしれないけれども、とにかく記憶の及ぶ範囲では一度もなかった。

40 **A** 何も言い返せないでいると、女の人は、もしかしたら事情があるかもしれないのに、ごめんさいね、と頭を下げて、コーヒーカップに口を付けた。千春は、自分が黙ってしまったことで女の人が **(ア)** 居心地の悪さを感じたのではないかと怖くなって、いえいえ事情なんて、と何度も頭を下げながらその場を離れた。高校をやめたから、と言ったら、たぶんその人はより申し訳ない気持ちになるのではないかと千春は思った。千春自身にとっては、何の意欲も持てないことをやめたに過ぎなかったけれども、高校をやめることがそう頻繁にはないことは千春も知っている。

45 その日も女の人は、九時の少し前まで店で本を読んで帰っていった。千春は、忘れた本人のところに戻っていったものの、**(注3)** 一度は家を持って帰ったサキの本のことがどうしても気になって、家に帰るのは反対方向の、病院の近くの遅くまで開いているチェーンの書店に寄って「サキ」の本を探した。文庫本のコーナーに入るのは初めてで、表紙を上にして置いてある本以外は、背表紙の文字だけが頼りなのでめまいがするようだった。本棚の分類が出版社別になっているということも、千春を混乱させた。女の人が忘れた本が、どこの出版社のものかなんてまったく見ていなかった。

50 三十分ほど文庫本のコーナーを見て回ったあと、千春は、棚の整理にきた小柄な女性の店員さんに、サキの本を探しているのですが、と話しかけた。正直、それだけの情報では、なんとかサキだとか、サキなんとかという人の本を出されるのではないかと千春は **(イ)** 危惧したのだが、店員さんは、ああはい、少々お待ちください、と言いつつ残した後、女の人が忘れていったのとまったく同じ本をすぐに持ってきて、今お店にはこの本しか置いていないんですけれども、と言った。千春は少し興奮して、これです、ありがとうございます、と受け取り、早足でレジに向かった。

55 文庫本なんて初めて買った。読めるかどうかわからないのに。明日になったら、どうしてこんなものを買ったのと思うかも

しれないけれども、それでもべつにいいやと思える値段でよかった。

60 いつもより遅くて長い帰り道を歩きながら、千春は、これがおもしろくてもつまらなくてもかまわない、とずっと思っていた。それ以上に、おもしろいかつまらないかをなんとか自分でわかるようになりたいと思った。それで自分が、何にもおもしろいと思えなくて高校をやめたことの埋め合わせが少しでもできるなんて(ウ) むしのいいことは望んでいなかったけれども、**B**と|
|にかく、この軽い小さい本のことだけでも、自分でわかるようになりたいと思った。

*

65 次の日、その女の人は、いらなかったらしいんですけど、もしよろしければ、とすごく大きなみかんを千春と菊田さんと谷中さんに一つずつくれた。みかんというか、グレープフルーツというか、とにかく大きな丸い果物だった。すいかほどではないが、プリンスメロンぐらいの大きさはあった。レジで応対して直接もらった菊田さんによると、ブント、という名前らしい。

「友達の病室で、隣のベッドの患者さんの親戚の人が五つくれたんだけど、一人じゃこんなに食べれないし、明日職場で配るにしても持って帰るのがとにかく重いから、つて」

菊田さんはブントを右手に置いて、おもしろそうに手を上下させて千春に見せた。黄色いボールみたいだった。

70 「隣のベッドの人のお見舞いの人が、いろんなものをくれるんだって。本当ならぜんぜん関わりがないような人同士が同じ場所において、その周囲の知らない人がさらに集まってくるから、入院って不思議よね」

菊田さん自身は、まだ入院はしたことがないそうだけれども、その日の暇な時間帯に谷中さんにたずねると、あるよ、とちよつと暗い声で答えた。

75 昨日日本を買って帰った千春は、いろんな話の書き出しを読んでみて、自分に理解できそうな話をなんとか探し、牛の話を読んだ。牛専門の画家が、隣の家の庭に入り込んで、おそらく貴重な花を食べている牛を追っ払おうとするが、逆に牛は家の中に入

り込んでしまい、仕方ないので画家は牛を絵に描くことにする、という話だった。牛専門の画家というのがそもそもいるのかという感じだったし、牛が人の家の庭にいて、さらに家の中に入ってくるというのもありえないと思っただが、千春は、自分の家の庭に牛がいて、それが玄関から家の中に入ってくると思うと、ちょっと愉快な気持ちになった。

80 その話を読んでいて、千春は、声を出して笑ったわけでも、つまらないと本を投げ出したわけでもなかった。ただ、様子を想像していたと思いい、続けて読んでいたと思った。C 本は、千春が予想していたようなおもしろさやつまらなさを感じさせるものではない、ということ千春は発見した。

ブントンをもらったその日も、家に帰ってからどれか読めそうな話を読むつもりだった。ブントンはお母さんに渡そうと思っていたが、千春は家の中のいろんなところに牛がいるところを想像していて、お母さんに渡すのは忘れて部屋に持って帰ってしまった。

85 また持つて行くよりは、お茶を淹れて本を読みたいという気持ちが勝って、もう勉強なんてしないのに部屋に置いてある勉強机の上に、千春は大きなブントンを置いた。D すつとする、良い香りがした。

(注) 1 どんな話を書いているかわからない顔の男の人——本文の前の場面で、千春は女の人が忘れた本のカバーに載っていたサキの写真を見ていた。

2 午前に千春がビルマのことについてたずねた——本文の前の場面で、サキが「ビルマ」(現在のミャンマー)の出身であることを知った千春は谷中さんに「ビルマ」について尋ねていた。

3 一度は家に持って帰ったサキの本——前日、千春は女の人が忘れた本に興味を持ち、自宅に持ち帰ってしまったが、翌日、その本を店の忘れ物の棚に戻しておいた。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

- (ア) 居心地の悪さを感じた 12
- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ 心細い感じがした
 ④ 落ち着かない感じがした
 ③ やるせない感じがした
 ② あじけない感じがした
 ① 所在ない感じがした

- (イ) 危惧した 13
- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ 疑いを持った
 ④ 慎重になった
 ③ 気後れがした
 ② 心配になった
 ① 恐れをなした

- (ウ) むしのいい 14
- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ 都合がよい
 ④ 要領がよい
 ③ 威勢がよい
 ② 手際がよい
 ① 気分がよい

問2

傍線部A「何も言い返せないでいる」とあるが、このときの千春の状況や心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 周囲の誰からも自分が幸せだとは思われていないと感じていただけに、女の人から幸せだと指摘されたことで、あまり目を覚ましてくれない友達の見舞いを続ける彼女の境遇を察し、言葉を失ってしまった。
- ② 人から自分が幸せに見えることがあるとは思っていなかっただけに、女の人が自然な様子で千春の境遇を幸せだと言ったことに意表をつかれて、その後の会話を続ける言葉が思い浮かばなかった。
- ③ 女の人の笑顔をもう少し見ていたくて会話を続けているのに、幸せだったことは記憶の及ぶ限り一度もなかったために話題が思い浮かばず、何か話さなくてはならないと焦ってしまった。
- ④ 仕事や見舞いのために長時間電車に乗らなくてはならない女の人と比べると、高校をやめたのも電車に乗らなくてよいという点からは幸せに見えるのだと気づかされ、その皮肉に言葉が出なくなった。
- ⑤ これまでお客さんと会話をすることがほとんどなかったために、その場にふさわしい話し方がわからず、千春が幸せな境遇かどうかという話題をうまくやりすぎず返答の仕方が見つからなかった。

問3

傍線部B」とにかく、この軽い小さい本のことだけでも、自分でわかるようになりたいと思った」とあるが、このときの千

春の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① つまらないと感じたことはやめてしまいがちな自分に最後まで本が読めるとは思えなかったが、女の人も愛読するサキの本は書店でもすぐに見つかるほど有名だとわかり、自分でも読んでみて内容を知りたいと思った。
- ② 高校をやめてしまった挫折感が和らぐことは期待できなくても、女の人が買い直してもよいとまで言うサキの本と同じものを入手して読むことで、その本をきっかけにして女の人とさらに親しくなりたいと思った。
- ③ 仕事帰りに書店に立ち寄り見つけるのに苦労しながら初めて購入した本なので、読書体験の乏しい自分でもこの軽い小さい本のことだけは、内容を知りそれなりに理解できるようになりたいたいと思った。
- ④ 娘が生まれたらつけようと思っていたサキという名を持つ作家について女の人の人から教えてもらいたかったのに、話がそれってしまったので、自分で読んでそのおもしろさだけでもわかりたいと思った。
- ⑤ 高校をやめたことの理由づけにはならなくても、何かが変わるといふかすかな期待をもって、女の人と会話をすることになったこの本のおもしろさやつまらなさだけでも自分で判断できるようになりたいと思った。

問 4 傍線部 C「本は、千春が予想していたようなおもしろさやつまらなさを感じさせるものではない、ということ」を千春は発見した。」とあるが、千春は読書についてどのようなように思ったか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

① 「牛の話」の内容そのものには嘘くささを感じたが、追ひ払おうとした牛を受け入れ自分の画業に生かした画家の姿勢には勇気づけられた。このことから、本を読む意義は、ただ内容を読み取るだけではなく、物語を想像し登場人物に共感することで自分の力にすることにありと思つた。

② きっかけは単なる偶然でしかなかったが、初めての経験がもたらす新鮮な驚きに支えられながら「牛の話」を読み通すところまでたどり着けた。このことから、本を読む喜びは、内容のおもしろさによって与えられるのではなく、苦勞して読み通すその過程によって生み出されるのだと思つた。

③ 「牛の話」は日常とかけ離れていて情景を想像するのが難しかったが、世界には牛と人との生活がすぐ近くにある人たちもいるという事実を知ることができた。このことから、本を読む価値は、内容のおもしろさよりもむしろ、世の中にはまだ知らないことが多いと気づくことにあると思つた。

④ 「牛の話」の内容そのものはおもしろいとは思わなかったが、未知の体験を経て想像しながら読んだ本には愛着を感じることができた。このことから、本を読んだ感動は、それを読むに至る経緯や状況によって左右されるので、内容がおもしろいかつまらないかはさほど重要ではないと思つた。

⑤ 「牛の話」の内容そのものはいかにも突飛なものに思えたが、それを自分のこととして空想することには魅力が感じられた。このことから、本を読むという体験には、書かれているものをただ受けとめるだけではなく、自ら想像をふくらませてそれと関わるのが含まれるのだと思つた。

問5 傍線部D「すつとする、良い香りがした。」とあるが、「ブント」の描写と千春の気持ちや行動との関係についての説明と

して最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 女の人が喫茶店のスタッフに一つずつくれた「ブント」は、人見知りで口下手だったために自分を過小評価していた千春が一人前の社会人として認められたことを示している。その香りの印象は、千春が仕事を通して前向きに生きる自信を回復する予兆となっている。

② 千春が自室に持ち込んだ「ブント」は、友達の見舞いの帰りに喫茶店で本を読む女の人の行動を真似、家とは反対方向の書店にわざわざ出かけて本を探した千春の憧れの強さを表している。その香りの印象は、他の人の生活に関心を持ち始めた千春の変化を示している。

③ 千春が本を読むときに自分のそばに置きたいと思った「ブント」は、女の人や喫茶店のスタッフに対する積極的な好意を表している。その香りの印象は、自分にしか関心のなかった千春がその場しのぎの態度を改めて周囲との関係を作っていくこうとする前向きな変化を強調している。

④ 千春が手にした「ブント」は、長く使っていなかった勉強机に向かった千春の姿と、交流のなかった喫茶店のスタッフに「ブント」を分けてくれた女の人の姿とを結びつける。その香りの印象は、千春が自分の意志で新たなことに取り組もうとする積極性を表している。

⑤ 女の人がくれた「ブント」は、それを勉強机に置き、その香りのなかでお茶を淹れて本を読もうとしている千春の姿と、喫茶店でコーヒを飲みながら本を読む女の人の姿とを結びつける。その香りの印象は、千春が本を読む楽しさを発見した清新な喜びにつながっている。

問6

Aさんのクラスでは国語の授業で千春の描写を中心に学んできた。続いてもうひとりの登場人物である女の人について各グループで話し合うことになった。Aさんのグループでは「①女の人はどのように描かれているか」「②千春にとって女の人はどういう存在として描かれているか」について考えることにした。次はAさんのグループの話し合いの様子である。本文の内容を踏まえて、空欄 I・II に入る最も適当なものを、後の各群の ①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

19	・	20
----	---	----

Aさん——まずは表情に注目してみよう。本文の1行目で、「申し訳なさそうに」忘れ物の本のことを尋ねてきた女の方は、4行目で本があつたことを千春が告げると、うれしそうに笑っている。

Bさん——それに釣られるようにして、千春も女の人に話しかけたいと思う言葉を頭の中でめぐらせ始めている。

Cさん——千春の運んだコーヒートチーズケーキについて、女の人が「いい匂い」と口にしたことで、二人の会話が始まったね。

Dさん——23行目で千春が緊張しながら話しかけると、女の人は笑顔で応じている。

Cさん——友達のお見舞いに来ているという自分の事情をぎくばらんに話してもいるよ。

Dさん——でも、67行目で喫茶店のスタッフに果物をあげるときに、職場で配るために持って帰るのも重いとわざわざ付け加えているのも、この人らしいね。そうそう、64行目では「もしよろしければ」という言い方もしているよ。

Aさん——そうすると、この人は I ように描かれていることになるね。これを(1)のまとめにしよう。

Bさん——次に(2)の「千春にとって女の人はどういう存在として描かれているか」についてだけど、5行目にある「ここに忘れてよかった」、という女の人の言葉をなんだか変な表現だと思ったところから、千春の心に変化が起きているね。

Dさん——気になる存在になった。どうしてだろう。

Aさん——文庫本もきつかけだけど、それだけじゃない。

Bさん——37行目で女の人に「それは幸せですねえ」と言われたのに千春が何も言い返せないでいたら、女の人が「もしかしたら事情があるかもしれないのに、ごめんなさいね」と言う。このやりとりは気になるね。

Cさん——女の人から「幸せ」だと言われたり、「事情があるかもしれない」と配慮されたりすることで、千春の心は揺り動かされているのかな。

Bさん——そうか、女の方は **II** きつかけを千春に与えてくれたんだ。

Aさん——「わかるようになりたい」という58行目の言葉も印象的だね。Bさんの言ったことが(2)のまとめになる。

I

19

- ① 相手を気遣うようでありながら、自分の心の内は包み隠す人である
- ② 相手と気さくに打ち解ける一方で、繊細な気遣いも見せる人である
- ③ 相手への配慮を感じさせつつ、内心がすぐ顔に出してしまう人である
- ④ 相手に気安く接しながら、どこかに緊張感を漂わせている人である
- ⑤ 相手の気持ちに寄り添いながら、自分の思いもさらけ出す人である

II

20

- ① 周囲の誰に対しても打ち明けられないまま目をそらしてきた悩みに改めて向き合う
- ② 高校を中退してしまったことを後悔するばかりだった後ろ向きの思考から抜け出す
- ③ 流されるままにただこなしていた仕事に意義や楽しさを積極的に見出していく
- ④ 他の人や物事に自ら働きかけることになかったこれまでの自分について考え始める
- ⑤ 他人に気遣われる経験を通して自分に欠けていた他人への配慮について意識する

第3問

次の文章は、『山路の露』の一節である。男君との恋愛関係のもつれに悩んで姿を消した女君は、やがて出家し、ある山里でひっそりと暮らしていた。女君の生存を伝え聞いた男君は、女君の弟(本文では「童」)を使いとして何度か手紙を送ったが、女君は取り合わなかった。本文は、あきらめきれない男君が女君の住む山里を訪ねる場面から始まる。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

夕霧たちこめて、道いとたどしけれども、深き心をしるべにて、急ぎわたり給ふも、かつはあやしく、今はそのかひあるまじきを、と思せども、ありし世の夢語りをだに語り合はせまほしう、行く先急がるる御心地になむ。浮雲はらふ四方の嵐に、月なごりなうすみのぼりて、千里の外まで思ひやらるる心地するに、いとど思し残すことあらじかし。山深くなるままに、道いとしげう、露深ければ、御隨身いとやつしたれどさすがにつきつきしく、御前驅の露はらふ様もをかしく見ゆ。

5 かしこは、山のふもとに、いとささやかなる所なりけり。まつかの童を入れて、案内み給へば、

「こなたの門だつ方は鎖して侍るめり。竹の垣ほしわたしたる所に、通ふ道の侍るめり。ただ入らせ給へ。人影もし侍らず」と聞こゆれば、

「しばし音なくてを」

とのたまひて、我ひとり入り給ふ。

10 小柴といふもの(イ)はかなくしなしたるも、同じことなれど、いとなつかしく、よしある様なり。妻戸も開きて、いまだ人の起きたるにや、と見ゆれば、しげりたる前栽のもとよりつたひよりて、軒近き常磐木の所せくひろごりたる下にたち隠れて見給へば、こなたは仏の御前なるべし。名香の香、いとしみ深くかをり出でて、ただこの端つ方に行ふ人あるにや、経の巻き返さるる音もしのびやかになつかしく聞こえて、しめじめとものあはれなるに、なにとなく、やがて御涙すすむ心地して、つくづくと見る給へるに、とばかりありて、行ひはてぬるにや、

15 「いみじの月の光や」

とひとりごちて、すたれ簾のつま少し上げつつ、月の顔をつくづくとながめたるかたはらめ、昔ながらの面影ふと思し出でられて、いみじうあはれなるに、見給へば、月は残りなくさし入りたるに、(注4)鈍色、かうぞめ香染などにや、袖口なつかしう見えて、ひたひがみ額髪のゆらゆらと削ぎかけられたるまみのわたり、いみじうなまめかしうをかしげにて、かかるしもこそらうたげさまさりて、忍びがたうまもりぬ給へるに、なほ、とばかりながめ入りて、

20 「里わかぬ雲居の月の影のみや見し世の秋にかはらざるらむ」

と、しのびやかにひとりごちて、涙ぐみたる様、いみじうあはれなるに、(注5)まめ人も、さのみはしづめ給はずやありけむ、
「ふるさとの月は涙にかきくれてその世ながらの影は見ざりき」

25 とて、ふと寄り給へるに、いとおほえなく、化け物などいふらむものにこそと、むくつけくて、奥さまに引き入り給ふ袖を引き寄せ給ふままに、せきとめがたき御気色けしきを、さすが、それと見知られ給ふは、いと恥づかしう口惜しくおぼえつつ、ひたすらむくつけきものならばいかがはせむ、世にあるものとも聞かれ奉りぬるをこそは憂きことに思ひつつ、いかであらざりけりと聞きなほされ奉らむと、とざまかうさまに(注6)あらまされつるを、のがれがたく見あらはされ奉りぬると、せむかたなくて、涙のみ流れ出でつつ、我にもあらぬ様、いとあはれなり。

(注) 1 千里の外まで——はるか遠くまで。

2 案内み給へば——様子をうかがわせてみると。

3 名香——仏前でたく香。

4 鈍色、香染——どちらも出家者が身につける衣の色。

5 まめ人——きまじめな人。ここでは、男君を指す。

6 あらまされつる——願っていた。

問 1 傍線部(ア)・(イ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

22

(ア) かつはあやしく

21

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ そのうえ不都合で
④ そのうえ不体裁で
③ 一方では不気味で
② 一方では不愉快で
① 一方では不思議で

(イ) はかなくしなしたる

22

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ いつのまにか枯れている
④ こぎれいに手入れしてある
③ 形ばかりしつらえてある
② 崩れそうな様子である
① かわいらしく飾ってある

問2 二重傍線部「ありし世の夢語りをだに語り合はせまほしう、行く先急がるる御心地になむ」の語句や表現に関する説明とし

て最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 「ありし世の夢語り」には、二人の仲は前世からの縁であるはずだと、男君が夢想していたことが表現されている。
- ② 「だに」は「まほしう」と呼応して、男君がわずかな望みにもすがりたいような心境であったことを表現している。
- ③ 「語り合はせ」の「せ」は使役の意味で、男君が女君自身の口から事情を説明させようとしていることを表現している。
- ④ 「急がるる」の「るる」は可能の意味で、女君のためなら暗い山道に行くこともいとわれない男君の決意を表現している。
- ⑤ 「なむ」の後には「侍らめ」が省略されているが、それをあえて書かないことで余韻をもたせた表現になっている。

問3

この文章の男君の行動や心境についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

24

- ① 女君のもとへ行く途上、先導の者が露を払いながら進むのを見て、山道の雰囲気に合う優美な様子だと思っていた。
- ② 童に女君の住まいの様子を調べさせたが、その童が余計な口出しをするのを不快に思い、黙っているように命じた。
- ③ 女君の住まいの様子が、かつて二人で過ごした場所の雰囲気によく似ているのを見て、懐かしさを覚えた。
- ④ 木陰から垣間見たところ、仏道修行に励んでいる女君の姿を目にし、女君の敬虔けいけんさに改めて心ひかれた。
- ⑤ 独り歌を詠み涙ぐむ女君の、可憐かれんな姿を目にするうちに、隠れて見ているだけでは飽き足りなくなってしまった。

問 4 この文章の女君の心境についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は

問わない。解答番号は

25

26

。

- ① 突然現れた男君を化け物だと思い込み、着物の袖をつかまれたことで、涙がこぼれるほど恐ろしく感じた。
- ② 目の前の相手が男君であることを知って動揺し、化け物であってくれたほうがまだあきらめがつくと思った。
- ③ 男君ほどつらい思いをしている者はこの世にいないだろうと世間が噂うわさしているのを聞き、不愉快に感じていた。
- ④ 男君に見つかってしまったのは、歌を口ずさんだのを聞かれたせいに違いないと思い、軽率な行動を後悔した。
- ⑤ 男君に姿を見られてしまい、もはや逃げも隠れもできない状況になってしまったことを悟って、途方に暮れた。
- ⑥ 男君が以前とは打って変わってひどくやつれているを見て、その苦悩の深さを知り、同情の気持ちがあわいた。

問5

この文章では、「月」がたびたび描かれ、登場人物を照らし、和歌にも詠まれている。それぞれの場面についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

27

28

- ① 3行目「月なごりなうすみほりて」では、遠く離れた場所に住む女君のもとへといたる道のりを月が明るく照らし出すことで、夜の山道を行くことをためらっていた男君の心の迷いが払拭されたことが象徴的に表現されている。
- ② 16行目「月の顔をつくづくとながめたる」では、女君は月を見て男君の面影を重ねながら長々と物思いにふけており、男君がいつかはこの山里まで訪ねてきてしまうのではないかと、女君が不安に思っていることが明示されている。
- ③ 16行目「月の顔をつくづくとながめたる」女君の横顔は、男君の目には昔と変わらないように見えたが、17行目「残りなくさし入りたるに」では、月の光が女君の尼姿を照らし出し、以前とは異なる魅力を男君に発見させている。
- ④ 15行目「いみじの月の光や」、20行目「里わかぬ雲居の月」と、女君が月を見て二度まで独りごとを言う場面では、仏道修行に専念する生活の中で、月だけが女君のつらい過去を忘れさせてくれる存在であったことが暗示されている。
- ⑤ 20行目「里わかぬ雲居の月」の歌における月は、世を捨てた者の暮らす山里までもあまねく照らすものとして詠まれており、昔と変わらないその光が、以前とは身の上が大きく変わってしまったことを、否応なく女君に意識させている。
- ⑥ 22行目「ふるさとの月」の歌は、20行目「里わかぬ雲居の月」の歌に答える形で詠まれたものだが、かつての女君の姿を月にたとえて出家を惜しんでいるところに、女君の苦悩を理解しない男君の、独りよがりな心が露呈している。

第4問

次の文章は、北宋の文章家曾鞏が東晋の書家王羲之に関する故事を記したものである。これを読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。(配点 50)

羲之の書、晚乃善。則其所能、蓋亦以精力自致者、非天

成也。然後世有能及者、豈其学不如彼邪。则学固豈

可以少哉。況欲深造道德者邪。墨池之上、今為州学舍。教

授王君盛、恐其不章也。書晋王右軍墨池之六字於楹間。

以揭之。又告於鞏曰、「願有記。」推王君之心、豈愛人之善、雖

一能不以廢、而因以及乎其跡邪。其亦欲下推其事、以勉其

学者邪。夫人之有一能而使後人尚之如此。況仁人莊士

之遺風、余思被於來世者如何哉。

(曾鞏「墨池記」による)

(注)

- 1 州学舎——州に設置された学校。
- 2 教授王君盛——教授の王盛おうせいのこと。
- 3 王右軍——王羲之を指す。右軍は官職名。
- 4 楹——家屋の正面の大きな柱。
- 5 鞏——曾鞏の自称。
- 6 仁人莊士——仁愛の徳を備えた人や行いの立派な者。
- 7 遺風余思——後世に及ぶ感化。

問 1 波線部(ア)「晚乃善」・(イ)「豈可_ニ少_一哉」のここでの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ・ 30。

(ア) 「晚乃善」

- 29
- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ 年齢にかかわらず素晴らしい
 ④ 晩年のものはいずれも素晴らしい
 ③ 晩年になってさえも素晴らしい
 ② 年を取ってからこそが素晴らしい
 ① 年齢を重ねたので素晴らしい

(イ) 「豈可_ニ少_一哉」

- 30
- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ なぜ若いときから精進しないのか
 ④ どうして努力を怠ってよいだろうか
 ③ なんと才能に恵まれないことだろうか
 ② きつと稽古が足りないにちがいない
 ① やはり鍛錬をおろそかにするにちがいない

問 2 空欄

X

に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31

- ⑤ ④ ③ ② ①
猶 当 未 将 宜

問3 傍線部A「豈其学不_レ如_レ彼邪」に用いられている句法の説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選

べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

32

33

。

- ① この文には比較の句法が用いられており、「_レには及ばない」という意味を表している。
- ② この文には受身の句法が用いられており、「_レされることはない」という意味を表している。
- ③ この文には限定の句法が用いられており、「_レだけではない」という意味を表している。
- ④ この文には疑問を含んだ推量の句法が用いられており、「_レではないだろうか」という意味を表している。
- ⑤ この文には仮定を含んだ感嘆の句法が用いられており、「_レなら_レないなあ」という意味を表している。
- ⑥ この文には使役を含んだ仮定の句法が用いられており、「_レさせたとしても_レではない」という意味を表している。

問 4 傍線部B「況欲_ニ深造_ニ道德_一者邪。」とあるが、その解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

べ。解答番号は 34。

- ① ましてつきつめて道德を理解しようとする者がいるのだろうか。
- ② まして道德を体得できない者はなおさらであろう。
- ③ それでもやはり道德を根付かせたい者がいるであろう。
- ④ ましてしっかりと道德を身に付けたい者はなおさらであろう。
- ⑤ それでも道德を普及させたい者はなおさらではないか。

問5 傍線部C「王君之心」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35

- ① 一握りの才能ある者を優遇することなく、より多くの人材を育ててゆこうとすること。
- ② 王羲之の墨池の跡が忘れられてしまうことを憂い、学生たちを奮起させようとする事。
- ③ 歴史ある学舎の跡が廃れていることを残念に思い、王羲之の例を引き合いに出して振興しようとする事。
- ④ 王羲之の天賦の才能をうらやみ、その書跡を模範として学生たちを導こうとすること。
- ⑤ 王羲之ゆかりの学舎が忘れられてしまったことを嘆き、その歴史を曾輩に書いてもらおうとすること。

問6 傍線部D「夫人之有一能而使後人尚之如此」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

① 夫人之有_二一能_一而使_二後人_一尚_レ之_レ如_レ此

夫_かの_人の_一能_有りて_後人_を使_ひて_此く_のご_とく_之を_尚ぶ

② 夫人之有_二一能_一而使_二後人_一尚_レ之_レ如_レ此

夫_かの_人を_之れ_一能_有れば_而ち_後人_をして_此く_のご_とき_に之_くを_尚ば_しむ

③ 夫人之有_二一能_一而使_二後人_一尚_レ之_レ如_レ此

夫_それ_人の_一能_有りて_後人_をして_之を_尚ば_しむ_ること_此く_のご_とし

④ 夫人之有_下一能而使_二後人_一尚_レ之_レ如_レ此

夫_それ_人を_之れ_一能_有にして_後人_をして_之を_尚ば_しむ_ること_此く_のご_とき_有り

⑤ 夫人之有_下一能而使_二後人_一尚_レ之_レ如_レ此

夫_それ_人の_一能_有にして_後人_を使_ひて_之を_尚ぶ_{こと}此_くの_ごと_き有_り

問7

「墨池」の故事は、王羲之が後漢の書家張芝について述べた次の【資料】にも見える。本文および【資料】の内容に合致しないものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

37。

【資料】

也^ト。
云^{ハク}張芝臨^{ミテ}池^ニ学^ビ書^ヲ池水尽^ク黒^シ。使^{メバ}人^ヲ耽^ル之^{コト}ニ若^{クナラ}是^{カクフ}未^ダ必^{ズシモ}後^レ之^ニ也^ト。

(『晋書』「王羲之伝」による)

- ① 王羲之は張芝を見習って池が墨で真っ黒になるまで稽古を重ねたが、張芝には到底肩をならべることができないと考えていた。
- ② 王盛は王羲之が張芝に匹敵するほど書に熱中したことを墨池の故事として学生に示し、修練の大切さを伝えようとした。
- ③ 曾鞏は王羲之には天成の才能があったのではなく、張芝のような並外れた練習によって後に書家として大成したと考えていた。
- ④ 王羲之は張芝が書を練習して池が墨で真っ黒になったのを知って、自分もそれ以上の修練をして張芝に追いつきたいと思った。
- ⑤ 王盛は張芝を目標として励んだ王羲之をたたえる六字を柱の間に掲げ、曾鞏にその由来を文章に書いてくれるよう依頼した。